投　稿

投稿「小学校での飼育活動から動物介在教育へ」

三品　佳子※　　堀　直志※※　　松岡　息吹※※

1　はじめに

小学校の学校経営の一環として動物飼育を取り入れ，児童の心に寄り添い，温もりを与える動物介在教育をすすめている．学校飼育動物にとっての動物福祉を考え，飼育活動を推進している．「誰にでも優しく，誰からも愛さる学校」として，児童と動物が触れ合い，動物たちから得られる癒しや心の交流を含めてこれまでの取組を紹介する．

2　学校ウサギのライアンが教えてくれたこと

私は数年前に副校長として着任した学校の，校庭の一角に置かれている飼育小屋の中に，一匹のウサギがいることを知った．毎朝の校舎内外の見回りの時に，飼育小屋にも立ち寄り，エサや水が置かれているか点検することが，私の毎日の業務であった．

小屋に立ち入ると，「あなた誰？」と言った眼差しで見ていたのが，一ヶ月もすると顔見知りになり，足をつんつんと鼻でつついてくるようになった．

しかし，立ち寄るのは見回りの私と，飼育当番の児童ぐらいで他の児童はあまり関心がないようであった．小屋の中にネズミが入り込み，ウサギのえさを一緒に食べていた．隙間から入り込んでくるようで防ぎようがなかった．世話をしている飼育委員会の児童も，それを心配して改善を訴えてきた．用務主事や役所の施設課に飼育小屋の環境改善を何度もお願いしたが，手間とお金がかかるため，後回しにされ，実現は難しかった．

そんな日々を過ごしているうちに梅雨時期になり，雨風が容赦なく降りかかる中，小屋に置き去りにされているウサギの姿を見るに見かねるようになった．トタンとポリカーボネイトの屋根の簡素な作りの小屋は，日差しが強い日には，日光がじりじりと照りつけ，トタン自体が暑く手で触れると熱い．日を避けるために，隅にうずくまるウサギの姿を見ては，何とかしなくては強く思うようになった．

ある朝，世話をする児童が「小屋の中が，暑い．かわいそう．」と訴える声を耳にし，「もうこれ以上，この小屋には置いておけない．」と段ボールの中にウサギを入れて，飼育小屋から，ウサギを連れ出した．安全で，雨風から逃れることができ，寒さ，暑さに気付いてやれることができる環境を探した．それは，人の目の行き届く場所である．ウサギを心配した事務職員が，飼育するためのケージを用意した．

目の届くところで飼育するようになった

ケージ飼育になったライアン

女の子とウサギのライアン

ウサギは，「ウサギ」ではなく，もともとあった「ライアン」という名前で呼ばれるようになった．薄汚れていた体もみるみる白くきれいになり，体に可愛らしい模様があることもわかった．「こんなウサギ，いたっけ？」と誰もいつからライアンが学校にいたのか知らない．獣医師に診てもらい，メスであることもわかった．飼育委員会の児童は，飼育

小屋ではなく，ケージの中のウサギ用のトイレや新聞紙の掃除をし，新しいエサを食べる分だけあげ，チモシーという干し草をあげる．これまでは，大きなたらいにエサを大量に与えっぱなしで，水にはゴミが入り，こぼれて空になっていることもよくあった．

体を撫で，世話をしては，「ライアンあったかいね．」「ふわふわしてるね．」とこれまで，飼育小屋で世話をしていた時とは違う感想をもらすようになった．これまでの児童の記録を見ると「隅でじっとしていた．」「ウサギがいた．」「ネズミがいた．」などであった．それが，「ライアンが笑った．」「ライアンがかわいかった．」「元気いっぱい．」などへと変化していた．

飼育委員会の児童が変わった後は，多くの児童が変わってきた．玄関周辺がライアンの定位置となり，登校時や休み時間，下校時など，いろいろな時間に児童と触れ会えるようになった．ちょっと疲れた時，寂しい時，ひとりになりたい時，児童によってはいろいろな理由があったり，理由などない場合もほとんどだろうが，ケージに立ち寄り，そっと覗き込んだり，隙間から手を入れてふわふわの体を撫でて行く．どちらかと言えば乱暴な振る舞いの子が，一人でそっとライアンに向かい合っていたり，友達とのトラブルで涙が止まらない子がライアンの世話をするうちに気持ちが落ち着いて，また教室に戻れるようになったりする．そんな場面を何度も見かけるようになった．教職員も同じで，夕方になるとライアンに話しかけたり，そっとさわったりして，癒しをもらっている．

学習場面においても活躍した．生活科の学習で低学年の教室へ出張し，学習の題材として触れ合い，作文の主役になり，絵のモデルにもなった．また，4年生の理科では，体のつくりの単元で，児童が脚を触って骨格を確認した．

人の目の届くところで飼うようになり，ほぼ一年が過ぎた．

一年生の児童が登校時にお母さんと離れることができず，おかあさんや教員を困らせていた．「ライアンにエサをあげに学校に来る．」ことを目標にし，次第にお母さんと離れられるようになった．二年生の終わりには「じゃあね！」と笑顔で別れることができるようになった．登校しぶりを直してしまうほどの力をウサギのライアンはもっている．セラピーラビットである．毎日天使のように全校児童を癒し，元気を与えてくれるライアンは学校中の人気者となり，小屋の中でぽつんと佇んでいた様子を想像できない．

３　２羽のウサギ「パチェとアクア」

副校長時代の経験から，現在の学校に着任するまで学校飼育動物の置かれた環境や動物福祉について考え，近隣の学校への飼育動物に対する啓蒙活動を微力ながら行ってきた．

現在校長として勤務する小学校には特別支援学級も併設され，知的固定学級が４学級あり 30 名程度の児童が在籍している．近くに２つの児童養護施設があり，そこから通ってくる児童もいる．通常の学級でも個別に配慮の必要な児童も増えてきている．集団に馴染めず，教室から出てしまう児童など様々である．

学校では，ウサギを２羽飼育していた．いつから飼育しているのか，名前はなんというのか，着任してすぐに副校長や教員に尋ねてみた．ウサギの名前の分かる教員を見付け，教えてもらった名前を全校朝会で児童に紹介した．それから２羽のウサギは，「ウサギ」ではなく「パチェ」「アクア」という名前で呼ばれるようになった．全校朝会や学校だより，様々な場面でウサギの「パチェとアクア」の話をした．教員の負担軽減のため，毎朝地域の方にボランティアとして来てもらい，飼育委員会の児童と共に活動をしてもらうようにした．長期休業中には児童宅でホームステイを行うようにした．飼育小屋ではなく，傍で様子を見取ることの出来る場所に置け，暑さ寒さに対応出来るよう，ケージ飼育へと環境を変更した．夏や冬場の対策として，校舎内の 1 教室を飼育部屋として開放している．日中は戸外にある広い飼育場にて自由に過ごし，下校時にケージに戻して室内に置いている．暑さ寒さ，大雨等への対応が出来，安心している．

昨年，パチェの口の中に腫瘍が出来，餌を食べることが出来なくなった．近隣の動物病院に治療と指導を受けながら，飼育委員会担当教員・飼育委員会児童・校長が交代で看護を続けた．体は二回りも小さくなり，毛が抜けて強制給餌が必要になった．三か月頑張っ

た．ある朝，ケージの中に横たわったままのパチェの姿があり，思わず抱き上げるとまだ柔らかく体から尿が流れ出てきた．息を引き取ったパチェとのお別れの為，草花で体の周りを飾った．そして飼育委員会児童と対面しお別れをし，全校児童とはお別れ集会を開き小さな命の終わりを悲しんだ．その後たくさんの児童からパチェへお手紙が寄せられた．

「パチェありがとう．パチェはよくがんばった．パチェがいなくなるのはみんなが悲しいけれど少しでも長生きしてくれて私はうれしかったよ．私は4年生の時にこの学校に転校してきて，今では6年生だ．私の中ではパチェとアクアは学校の守り神的存在だったよ．パチェは病気と闘っていてご飯も少ししか食べられなかった．最後の夜のご飯はよく食べていたと校長先生から聞いた時は少しうれしくなったよ．パチェが少しでもご飯を食べられるのはすごいと思っていたよ．天国にいっても空から学校のみんなを見守って，天国では自由に生きてね．ありがとう．」

寄り添うパチェとアクア

パチェのお別れ

残されたもう1羽のウサギのアクアは今年で10歳である．飼育委員会の児童を中心に大切に飼育を継続している．アクアだけでなく，烏骨鶏のモフとモコの2羽も仲間入りし学校の児童たちに癒しと温もりと小さな命の存在価値を伝えてくれている．

4　動物介在教育へ

現在学校では，「誰にでも優しく誰からも愛される学校」を目指し，命を大切にした取り組みを推進している．人権尊重教育推進校として東京都の指定を受けて研究をすすめている．その一環として命との触れ合いや自分や友達を大切にする心情へと繋げていくために動物との触れ合い活動を取り入れることになった．アクアとモフとモコの飼育活動だけでなく，教室で飼育されているカメ・金魚・モルモット・ウズラを今以上幸せにすることを目標にし，期間限定で他の小学校からヤギをレンタルした飼育活動へ展開した．

(1)　ヤギのココアのレンタル飼育

ココアを見に来た近隣の保育園児（2歳児）

東京農工大学の支援によるふれあい動物教室を行ったことをきっかけに，特別支援学級の児童から，「ヤギやモルモットを飼いたい．」との声が上がった．モルモットは動物園から分けてもらうことが出来た．ヤギの飼育は東京農工大学に相談の上，飼育している小学校から二か月間貸与してもらうことが決まった．それからは，飼育場所の整備・餌の確保について，地域を巻き込んだ活動に発展した．大型動物であるヤギの存在は他を圧倒させ，目を見張るものがある．優しくて愛嬌のある目は，何でも理解しているかのように，あっという間に児童を虜にした．児童は休み時間になるとヤギの周りに集まり「ココア！ココア」とその名前を呼び，家から持参

した野菜や落ち葉をあげて関わっている．穏やかで温もりの感じられるひと時である．近隣の保育園や老人施設からもヤギのココアに会いにやって来るようになり，交流の輪が広がった．

ココアを見に来た近隣の保育園児（4 歳児）

特別支援学級では，お借りしている小学校とオンラインで共にココアの様子を観察し，一緒に歌を歌い，手紙を紹介し合ったりした．通常学級での低学年での生活科の観察や心音を聞く学習等，学習場面でも活躍した．

オンライン授業の様子

生活科授業にて心音を聴く１年生児童

ココアは間もなくお借りしている小学校に戻る．ココアが繋いでくれた交流の輪が今後も続いていけるようにしていきたい．

(2)　ウズラの孵化　特別支援学級ポプラ 3 組の取組（松岡息吹）

動物との触れ合い体験を通して，児童から「教室で動物を飼いたい」という声が上がるようになった．ポプラ 3 組は 5 年生 6 名の単学年学級であり，一学期にはアカヒレの産卵を学習し，採取した卵からアカヒレのふ化を行った．その学習を生かし，東京農工大学からウズラの卵をいただき，二学期はウズラのふ化を行うこととなった．ウズラを卵からふ化させると聞いた児童たちからは，「それはむずかしいよ」「できるかな」など，不安の声も聞こえてきた．その中で，ウズラのふ化について一か月かけて学習し，孵卵器の温度や湿度，食性や飼育ケージの環境などを調べ，ウズラが生まれてくるまでの準備をすすめてきた．

孵卵器に卵を入れてから 17 日で生まれてくるため，日曜日に 6 羽のウズラが生まれた．月曜日に，誕生時の動画を見てから，生まれたウズラがいる別室へと向かった．生まれて間もないウズラを見た児童からは，「小さいね」「かわいい」「さわったらつぶれちゃいそう」など初めて見る小さな命への思いを次々と口にしていた．「あの小さな卵から，どうやって鳥が生まれるの？」という質問は，支援していただいている大学の教授から丁寧に説明を受けることができた．普段生活している中で，ウズラの卵を見たり食べたりしたことのある児童がほとんどという中で，実際に誕生したウズラを見たからこそ感じられた質問であると考える．

大学の教授による検卵授業

現在は，最初に孵卵器にいれた 15 個の卵から 6 羽，そして，新たに 14 個の卵から 9 羽が誕生した．ウズラを介した保育園との交流も始まっている．生命の誕生を見て，そこで終わるのではなく，それからの飼育にも毎日，責任をもって取り組んでいる児童の成長は，動物介在教育で目指すべき姿の一つではないだろうか．

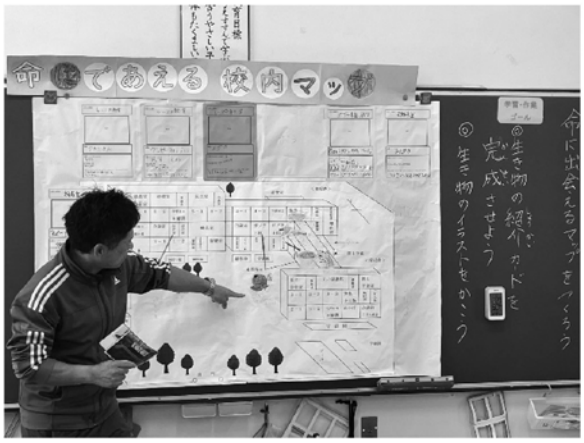
生まれたばかりのウズラのひな

(3)　モルモットのムギから始まった特別支援学級全体の取組について（堀直志）

ムギ

「モルモットを飼ってみたい」という児童の思いを受け，今年の 5 月に動物園から東京農工大学を介して 1 匹のモルモットを譲渡していただいた．これが「ムギ」と学級の児童との出会いである．教室に来た当初，主に世話をする 6 年生の児童たちは，触れ合いたい気持ちを抑え，「大きな声を出したらムギが怖がってしまうよ」「触るのはもう少し慣れたらにしよう」と，「ムギ」が新しい環境で安心して生活できるようにと，優しく見守ろうとする姿が見られた．また，毎日「ムギ」のために大好きな野草を取ってきたり，フンを一つ一つ取り除いて，ケージをきれいに掃除したり，「穏やかで優しい同居者」のために自発的に自分たちができることを考え行動する児童の姿を目の当たりにすることができた．

そして，学級全体としては，前述にあるように，「ふれあい動物教室」をきっかけにして動物への興味，関心を高めた学級の 1 ・2 年生，3・4 年生，5 年生，6 年生の 4 つのクラスごとに，児童の発達段階や実態，系統性を踏まえて，『動物の命との出会い（1・2 年）』『動物の命を輝かせる（3・4 年）』『動物の新しい命を輝かせる（5 年）』『人と動物の命を共に輝かせる（6 年）』といった動物をテーマにした単元を設定し，学習活動に取り組んでいる．これらの学習を通して，動物と直接的かつ継続的に関わる中で，児童自身が人と動物とのつながりや関わり方，共生の在り方について経験的，体験的に学ぶことができるようにさせたい．そして，人としての「役割や責任」，「命の連鎖や多様性」などについて考える中で，動物愛護の精神や生命への尊厳への自覚を深めるとともに，児童の自尊感情を高めていきたいと考える．



授業「命と出会える校内マップ」

5　まとめ

ヤギのココアが来て，多くの児童がこれまでよりも動物に関心を示すようになった．朝や休み時間には餌をあげ，ブラッシングをして触れ合い，下校時にはココアに話しかけ，「じゃあまた明日ね！」と帰って行く児童がいる．数名の高学年の児童は，毎日ココアに寄り添い献身的に世話を続けた．糞の始末や飼育場所の清掃など率先して働き，その姿は周りの児童たちにも影響を与えた．教職員か

らも認められる存在となり，本人たちの自信にも繋がっていった．動物飼育を通して地域の農家，保育園・高齢者施設との新たな交流の輪が広がり，親子飼育ボランティアとして保護者との繋がりも深まった．動物を大切に思う気持ちを児童だけでなく保護者や地域の方々と共有することが出来ている．

校庭を散歩するココア

今後の飼育活動を継続するためには，学校管理職をはじめとする教職員の意識の啓発とそれを支える地域の体制が不可欠である．学校で動物を飼育する事は，教育的効果は理解していても，教職員への負担が大きい．その動物に適した環境整備や暑さ寒さへの対応，餌の管理，医療費の問題など課題は山積である．過度な負担からせっかくの動物飼育を不幸な結果にしたくはない．今後この問題を解決するために，地域の動物サポーターのさらなる発掘と，獣医師や専門家等との連携を取りながら，今回のヤギのレンタル飼育を含め，さらに様々な学習場面において動物を活用した授業を推進していく．そして，動物から得られる癒しの効果を最大限に活用したい．

どこの学校でも登校しぶりや，不登校・いじめの問題はある．ぜひ，飼育している動物に光を当て，人の目の届くところで飼い，人の目に触れるようにしてみてほしい．学校で飼育されている動物にとって幸福なだけでなく，その何倍もの癒しを私達に返してくれるであろう．

夕焼けの校庭で下校中の児童とココア

（小平市立第九小学校　※校長　※※教諭）